

第3学年国語科の実践

1 単元名 本は友だち

2 単元目標 関) 自分の好きな本、思い出の本などを選んで、紹介しようとする。
 話聞) 相手や目的に応じ、伝えたいことが伝わるようで紹介・説明ができる。
 目配り、言葉の抑揚、間の取り方などに注意して話すことができる。
 話の中心に気を付けて簡単にメモを取りながら聞くことができる。

3 「ひびき合う子どもたち」を目指すための指導の工夫

テーマ「ひびき合う三の丸の子どもたち」

研究課題…切実な問題意識をもち、友だちと関わり合いながら学習する子どもの育成

手立て …子どもの「切実な問題」を見とった授業づくり

ブロック…「追究する力、仲間と支え合う自分」自分の問題をとことん追究する 仲間と協働して追究する

○単元に関わる実態と学級づくり、授業づくり

【伝え合うことについて】

	伝え合いが好きな子(1/3程度)	伝え合いが苦手な子(2/3程)
	自分の思っていることを伝えたい 感想も質問も伝えたい 意見が聞けるってうれしい 自分の経験ともつなげよう	挙手・起立は負担だな。間違うのは怖いな 感想・質問なんてないなあ 友だちの意見はどうでもいいなあ なるべく一言で済ませたい

こちらへ移したい。

●そのために……

- ・伝え合いのよさをたくさん体験させる：ペア、グループ、全体など場面に応じて取り入れる
- ・普段語での「つぶやき」を大切にする：より自然な形で伝える場面を設定する
- ・望ましい話し方・聞き方の価値づけをする(ほめる)

●読書が広がる環境づくり

- ・学級文庫に教師のおすすめの本を加える
- ・教師がまず読書を楽しむ
- ・読書タイムに読み聞かせをする

○単元指導計画

①単元について

「本は友だち」は、さまざまな観点から、「本」「読むこと」「読書」について親しんだり考えたりする単元であり、6年間を通じて設定されている。低学年では、「本や図書館に親しむ」、中学年では「目的に応じて本や図書館を活用できるようにする」、高学年では「本と人との関わりを客観的に捉える」といったことを目指す。三年生では、図書館の活用、選書方法、本の紹介の仕方について学習する。本単元で、取り掛かりやすい本に触れ、児童相互で紹介し合う。本に親しみ、自分の好きなジャンルに気付いたり、読書の幅を広げたりすることを目指す。さらに学年終末部の「本は友だち」で、さまざまなジャンルの本に触れ、さらに読書の幅をさらに広げていくことを目指す。

読書量が増えたり幅が広がったりすることは、知識の幅や想像の幅が広がることであり、小学校中学年のこの時期に、十分に積ませたい経験の一つである。読書量が少ない児童は、読書そのものが苦手というよりは、「面白い本」「興味のある本」との出会いが希薄であることが少なくない。

そこで、コスモスの利用法を確認することで、本との出会いの機会を増やしたい。また、読書や新しいジャンルの本に興味を持つきっかけ作りとして、本紹介を行う。本紹介は、自分にとって身近な人や親しい人、価値観の近い人であれば、より興味がわくことが多い。友だち同士で本紹介を行うことは、そのよさを生かす学習であるといえる。

本を選ぶ段階では、本を選びながら、友だち同士で自然と情報交換できるようにする。その中で自分の好みの本や、友だちの好みや趣味に気付いたりするであろう。自分の好みに気付くことは、選んだ本へのこだわりを生み、友だちの好みを知ることは、「紹介したい」という意欲につながられる。「この本、このジャンルが好き」という気づきから「この本面白い、みんなに伝えたい」「あの人もこの本が好きかも」「選んだ本を(〇〇さんに)紹介したい」という気持ちに高めることができるであろう。

本紹介をし合うという活動は、個人的活動である読書を、紹介という活動を通じて他者とつなげることであり、他者とのつながりが深まることは、人間関係が深まることを意味する。人間関係が深まった実感は、さらに読書

への興味を高め、読書→紹介→自己・他者理解→人間関係の深まり→さらなる読書 という正のスパイラルを生み出すこと可能であると考え。

本紹介の段階では、「読んでみたくなる紹介」を目指すことで、本紹介という活動から、効果的な伝え方や、話し方の工夫を考え、身につけることができる。

以上のような学習意義を考え、本単元を設定した。

②指導について

本単元の学習を通じて身につけてほしいこと

- ・読書の幅が広がってほしい
- ・伝えたいことが伝わる工夫を考えるようになってほしい
- ・定型的な話し方から抜け出し、自分なりに話し方を工夫しようとしてほしい
- ・友だちの発言に、感想や質問を持ち、自然と伝えられるようになってほしい

前述のように、本学級の児童は、本を手にするのは好きである。しかし、活字を追うことに積極的ではない（活字の少ない本を好む）児童もいる。また、小グループで意見交換することを好むが、全体での交流や意見交換は、模索段階にある。

そこで本単元では、「紹介したい本を取り上げておすすめするポイントが伝わるように話す」という活動を通じて、本の面白さに触れ、読書の幅を広げたり、読書好きになったりすることに主眼を置く。その過程で、効果的な話し方、よりよい聞き方を学習していきたい。

事前に読書について触れ、「読書」とはストーリーを文字で追っていくものであることを確認する。またクラスの読書タイムの現状について触れ、「ミッケ」など、あまり「読書」に当てはまらない本が多く読まれていることに気付くであろう。読書の時間を充実させるために、「本を紹介したい」「紹介ブックを作りたい」「とっておきのクラス本棚を作りたい」という願いを育て、それを広げながら単元を進めていく。

本選び・とっておきのクラス本棚づくりにおいては、家から思い出の本やおすすめの本を持って来たり、コスモスを利用したりする。コスモスでは、図書館利用の仕方について確認する。それによって、気が向いたときに、気軽にコスモスを利用できるようにする。同時に、たくさん本に触れ、紹介する気持ちをさらに高めたい。ストーリーを文字で追っていくことを苦手と感じている児童には、絵本を推奨していきたい。絵本であれば、挿絵が多く親しみやすく、短時間で読み終えることができるので、読書を苦手と感じている子どもでも楽しむことができると考えられる。

コスモスでの読書・選書時間には、学習感想をもとに児童の思いを見取り、児童の思いと選書の状況を考慮して、じっくりとおすすめの本を選書できるようにしたい。また、早く選べた児童はまだ見つからない児童に紹介したり手伝ったりすることで、紹介したりされたりする経験をプレ体験できるようにする。それにより、紹介される側もする側も知的な好奇心が喚起されると考えられる。

紹介準備の段階では特に、次の2点に重点を置いて指導したい。

- ・自分の感じた本の面白さが伝わるように自分なりに表現する(紹介、読み聞かせ、本作りなど)。
- ・目の配り方、言葉の抑揚や強弱、間の取り方など効果的な話し方・読み方・伝え方を考える。

紹介の手段は座席表にして、児童の思いを見取ったり、児童相互で確認し合ったりする中から、カード(文や絵)、スピーチ形式、読み聞かせ、クイズ形式など、選書した本に合った、自分なりの方法で紹介ができるとよい。本クラスの実態から、どのように準備すれば「読んでみたくなる」紹介になるかが掴めず、困り感を持つ児童が出るように思われる。その困り感を広げたり、「紹介して読んでもらいたい」という単元始めの思いに立ち返ったりしながら、「よりよい紹介のポイントを知りたい」「自分以外の紹介を参考にしたい」といった、実感を伴った、切実な思いを育てたい。

状況によっては、教科書の本紹介例に触れ、効果的な紹介のポイントを押さえることも考えられる。ここでは、以前読書タイムで読み聞かせをした「エルマーの冒険」を題材として取り上げ、内容と話し方の両面からよい点を考えて出し合い、今後の紹介準備の指標にできるとよい。

紹介準備の後半では、紹介をする目的を再確認して、「読んでみたくなるような紹介となっているか確認したい」という思いを育てたい。その思いをもって、グループ(紹介する本の種類・内容や、話す・聞く力の実態を考慮して構成した少数グループ)でリハーサルを行い、目的に合った紹介へと協力して高められるようにしていきたい。

本紹介は、価値観や好みが近い友だちから紹介してもらうことにより、より自分に合った本に出会い、「紹介したい」という好奇心が高められると思われる。その好奇心をもとに、紹介したり聞いたりすることで、読書への親しみが増すとともに、より興味を持って話したり聞いたりできるだろう。

発表会は、話し方や説明のしかたを自分なりに工夫しながら、一人ひとり行う。聞き手は、紹介を聞いて読んでみたい本が見つかるとうい。

読書の習慣が根付き、紹介したりされたりする姿が日常化する姿や、それにより人間関係が深まることを期待したい。

③本単元におけるひびき合いについて

ブロックテーマ「追究する力、仲間と支え合う自分」自分の問題をとことん追究する 仲間と協働して追究する 本単元のひびき合いは次のように考えている。

「友だちと関わりながら、自分の紹介や友だちの紹介を「聞く人がより読みたくなる紹介」へと高めること。」
 本紹介は、「聞いた人が紹介した本を読みたくなる」必要がある。「紹介したいから紹介する」という個人の思いから、常に紹介する目的に立ち返り、「聞いた人の心を動かす」紹介を目指せるようにしたい。

紹介準備の段階では、カード、読み聞かせ、スピーチなどさまざまな方法の中から、選んだ本に合った自分なりの方法を選ぶようにする。そして「読んでみたくなる」紹介になるためのポイントをクラス全体で作り上げる。個人で考え、小グループで高めあいながら全体で共有化していく。

紹介の見通しが立ったら、グループでリハーサルを見合ったり、アドバイスしあったりする。ただの感想交流にならないように、事前に確認した、「読んでみたくなる」紹介のポイントを確認し、参照できるようにしておく。そのポイントを参考にしながら、「もっとこうの方が伝わるんじゃない?」「ここでこういうことをしたら分かりやすいんじゃない?」というように、一つの紹介を、グループ皆で作るような姿を期待したい。こうした中で、考えや思いを再構築したり、グループ協働で紹介をより高め合ったりする姿をひびき合いとしたい。

友だちに紹介され、ひびき合えたならば、読書に対する何らかの思いが高まるはずである。本単元の学習は、単元の終了と共に終わるものではなく、学習中や学習終了後にこそ成果が見られる。「紹介されたあの本を読みたい」と感じる、友だちに紹介したり紹介を求めたりする、学級文庫を充実させたいと感じる、読書量が増えるといった読書に対する気持ちの高まりが見られることを本単元ひびき合いの成果と位置づけたい。

4 単元指導計画 (全8時間扱い)

次	時	学 習 活 動	評価基準と《評価資料》
一	1	◆クラスの読書の状況について考える ・課題設定「おすすめの本を紹介しよう」	【関】本に親しむにはどうするのがよいか考えている。 《観察、挙手》
二	2 3 4	◆おすすめの本選び、思い出の本探しをしよう ・コスモスへ行って本選びをしたり、家から思い出の本を持って来たりする。 ・友だちと協力して探したり、教え合ったりする	【関】自分の好きな本、思い出の本を選んだり探したりしようとしている。《観察》 【読】題名、著者、表紙、挿絵などを見ながら、本を選び、読んでいる。《観察》
三	5 6 8	◆本紹介をしよう ・本紹介の方法を考える ・本紹介のポイントを考える (本時) ・自分なりの本紹介を考え、紹介原稿を書く ・グループでリハーサルを行い、「聞いた人が読みたくなる紹介原稿」へと高める ・本紹介をする	【関】自分の本に合った紹介の方法を選び、紹介の準備を意欲的に進める。《観察》 【書】聞く人が読みたくなることを意識して、本紹介原稿を書く。《ノート》 【話】話し方のポイントを意識しながら、効果的に話す。 《発表会観察》

5 本時について

(1) 本時目標

関)「読んでみたくなる」紹介のためのポイントを考えて伝えようとすることができる。

話・聞)自分で考えたり、友達の意見を参考にしたりしながら、紹介のポイントを話したり聞いたりすることができる。

(2)本時の指導について

本時は、前時まで確認した「紹介して読んでもらう」という目的のために、聞いた人が「読んでみたくなる」紹介のポイントをまとめていく。紹介のポイントを考えたり練り上げたりしていく上で、個→ペア→全体→個の学習形態をとっていく。

まず、自分の紹介を見通し、紹介する上で必要な事や、より「読んでみたくなる」ためにあったほうがいい事や、したほうがいいことなどを考える(個)。その考えを隣の児童などに伝えたり簡単に紹介して見せたりして、アドバイスをし合う(ペア)。自分で考えたことやアドバイスしてもらったことを全体で伝える(全体)。最後は全体で出し合ったことの中から、自分が取り入れたいポイントを考える(個)。

ペアの過程は、紹介された相手がどのように感じたか知るためのものであり、自分の紹介にアドバイスをもらい客観視する機会として行う。

(3)本時展開(6/8)

学 習 活 動	●指導上の留意点と◇評価
<p>1 前時を振り返る・本時の学習の見通しを持つ 「気に入ってくれる」「好きになってくれる」「楽しく読んでくれる」「理解してもらえる」しょうかいにするための工夫を考えよう。</p> <p>2 「読んでみたくなる」紹介のポイントを考える</p> <p>個→ペア→全体 板書イメージ</p> <div style="display: flex; justify-content: space-around;"> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: 15%;"> <p>・ しょうかいするとき</p> <p>・ 目配り(聞き手を見る)</p> <p>・ 声(大きさ、感情をこめるなど)</p> <p>・ 指さし</p> <p>・ くり返し など</p> </div> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: 15%;"> <p>言葉で紹介する場合</p> <p>・ 表紙やさし絵のイラスト</p> <p>・ シリーズ紹介</p> <p>・ あとがき など</p> </div> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: 15%;"> <p>絵と文でしょうかいする場合</p> <p>・ 始めと終わりに言葉</p> <p>・ なるべく暗記</p> <p>・ 小道具を作る など</p> </div> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: 15%;"> <p>共通</p> <p>・ あらすじ、本文(最後まででは伝えない)</p> <p>・ 自分の思いを入れる (面白い、読んでほしいと思うところなど)</p> <p>・ 誰に、どんな人に読んでほしいか</p> <p>・ どこで手に入れられるか</p> <p>・ 話す順番を工夫する など</p> </div> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: 15%;"> <p>「読んでみたくなるしょうかい」にする工夫</p> </div> </div> <p>3 学習感想 感想の視点「自分の紹介に取り入れたいポイント」</p>	<p>●座席表を活用し、クラス内の思いを確認する。</p> <p>●個→ノートに考えを書く</p> <p>●ペア→隣同士で「こんな感じの紹介」と伝える、やってみる→感想、アドバイス</p> <p>●全体→挙手&発言者指名</p> <p>●交流が停滞したら、教科書の紹介例に触れる。</p> <p>◇「読んでみたくなる」ために必要なことやよりよい工夫を考えようとしている。〈関〉</p> <p>◇自分の考えを伝えたり、友だちのアドバイスを取り入れたりしている。〈聞・話〉</p> <p>●個→ノートに、紹介に取り入れたいことを書く。</p>

6 実践を終えて

・子どもと協働の単元作り

単元の立ち上げや、単元学習の進め方を、つとめて子どもに寄り添って創造するようになってきた。

単元の立ち上げ前に、学級文庫に本を加える、教師おすすめの本を読み聞かせる、国語の時間に「読書」の定義について考える、教師の考える読書の良さを伝える といった取り組みを通して、読書や本紹介学習に入る素地作りや読書に親しむ環境づくりをしておいた。

単元の立ち上げ場面では、まず、クラスの読書の状況について尋ねた。「本を借りたい」「探したい」「紹介したい」といった思いが挙がった。単元の計画を立てる段階では、児童の意識は、「とっておきの学級文庫を作りたい」といった思いから、本紹介へとつながる予定でいた。実際は、学級文庫への思い入れよりも、直接本に触れたい、本紹介したいという思いが強かった。そこで、「図書室に行ってたつぷりと本に触れ、気に入った本をクラスで紹介する」という学習課題が設定されることになった。

図書室で本に触れる過程では、自然と友だち同士で気に入った本の紹介が見られた。感想をとると、回を重ねるごとに、「紹介をしたい」という思いを持つ児童が自然と増えていった。

・切実な課題について

本時課題：「読んでみたくなる」紹介のポイントを考える。

教師の見取りとしては、前時までの段階で、児童の思いは、紹介のポイントを考えることに向かっているはずであった。実際は、今日はどうのような学習をするか(したいか)問うたのに対し、半数近くの児童が、「紹介文作りに入りたい」と答えた。そこで、よい紹介文を作る見通しが立たず、不安を持っている児童に注目するようにした。クラスの中に、紹介のポイントを知りたいと思っている友だちがいる事実を広げ、クラスとして、それを放置して先にすすめない思いを高めた。「もう書き始めたい」と思っている児童には「紹介のポイントを広げたい(ねばならない)」、不安を持っている児童には「ポイントを知りたい(ねばならない)」という課題が創造されたように思われる。

・成果と課題

<学習の成果と単元のその後>

本単元の学習を通じ、本そのものへの興味や、本を紹介したいという思いを高めることができたように思う。実際、単元中や単元終了後に、自学ノートに本紹介文を書く児童が増えた。また、自分のお気に入りの本を読んでもらいたいという思いから、学級文庫にお気に入りの本を加える児童も増えた。結果として、子どもたちが、「学校一学級文庫が充実しているクラス」と自負するほど、学級文庫が充実することとなった。

<ひびき合いについての課題>

ひびき合うための前提には次のようなものがあると考えた。

- 全ての児童が認められ、受け入れられる学級づくり

- 単元学習が始まる前に、その単元を学習する必然性を高める
- 「やりたい」と思っている活動を十分にやる(ex.本に十分に触れておくなど)
- 十分にやった活動をベースに、一人ひとりが、意見・考え・見通しを持つ
- 児童の思いを十分に把握し、児童も教師も全ての児童の考えを知る
- 児童の思いを重視しつつ、教師の交通整理を軽視しないで単元を進めていく
- 本時の課題意識は、前時までに作っておく

今回の単元では、本単元を学習する必然性を十分に高められたか、また、「やりたい」と思っている活動を十分にやり、それを基に一人ひとりが自分なりの思いを持てたか疑問が残る。結果として、教師の思いが先行してしまった感が否めない。子どもの思いを十分に把握して、